渥美さんのこと

猪俣　　浩

英米文学科主任としてではなく、一人の友人として書きたい。

とうとう先にいってしまわれた。こんなにも早く、こんなにも急に―― 誰がそれを予測しただろうか。

渥美さんは死ぬ話をするのが好きだった。そういう人に限って長生きするものだと、こちらはおなかの中では思っていた。いざという時に見せる彼の粘り。どう見ても私の方がぽっくりと先に逝きそうな気がしていた。家内もよく言っていた、「ああ見えても渥美先生の方がきっとご丈夫なのよ」。その話を彼にしたらちょっぴり嬉しそうな顔をした。目白の駅前の喫茶店でお会いしたのが最初だった。もの静かな紳士に、持ち前の大声を出したらしく、後で時々からかわれた。思えば、体付き、性質、声の出し方、何一つ共通点はないはずなのに、どうしてうまが合ったのだろうか。彼の気の小ささ、弱さに歯がゆい思いをしたことも何度かある。それなのに―― 私が好きだったのは、渥美さんが自分の弱さを隠さないことだった。（羽をふくらます鶏のような人間も多いのに。）そして、実は私も大変気の弱い子供だった。やはり自分の反映を私は彼の中に見ていたのだ。

渥美さんは誠実な人だった。この齢になると、英文学科のことなんかどうなったって好いんだと、口では言っていたが、私が思い悩んで相談すると、必ず真剣に考えてくれた。こちらの愚痴にもよくつきあってくれた。もちろん、こちらも彼の長電話には辛抱した。あのような character に二度とは遭えないだろう。渥美さん！なんとか猪俣は頑張ってますよ。

（英米文学科 主任教授）